

# 第39号 華山会報

平成29年12月1日

公益財団法人華山会

## 田原藩と幕府奏者番

人間文化研究機構国文学研究資料館・研究主幹 大友 一雄



江戸幕府の老中・若年寄・京都所司代・大坂城代・寺社奉行・奏者番など幕閣の主要な役職は、特定の譜代大名によって勤められたことが知られている。田原藩三宅家では大坂加番・日光祭礼奉行を頻繁に勤め、ときに奏者番(二代康雄、十一代康直)・寺社奉行(二代康雄)などに抜擢された。田原市博物館には、これらの役職務めに関する文書が多数伝存する。とくに奏者番・大坂加番の両職に関する文書群は、全国的に見ても優れた質量であり、藩主の勤務や、藩内の対応などが明らかとなる。

江戸殿中儀礼に関係した奏者番の場合、登用される大名数は十数人から二十名ほど多く、勤務は日替わり当番が一人ずつ担当したが、大規模な儀式では非番の者が加勢した。関係する儀式は、正月年始など歳事的な儀式、將軍家の人生儀礼、將軍への謁見などに大別でき、いずれも身分格式によって厳格に編成されていた。儀式に間違いが起これば、参加者の身分格式、幕府の権威に関わる問題ともなりかねない。そのため高い管理能力が求められ、江戸幕府の役職について記した『明良帯録』では「君辺第一之職にて、言語伶俐、英邁之仁にあらされは堪へず」と記す。この職を振り出しに寺社奉行や若年寄・老中への昇進の道も開かれており、勤務は藩全体にも関係したといえる。

確実な職務遂行には、現場体験・事前練習などとともに、先例情報の資源化が不可欠であった。まず、奏者番はa. 殿中儀式に関する過去の情報を収集し、b. 分析のうえ有用情報を選別し、c. 個々の有用情報の活用のためのプラットフォームを整え、さらにd. 目的の情報を簡便に抽出するための検索活用システムの整備がそれぞれ必要となつた。

この具体的な方法のひとつが「手留」である。手留は個々の情報単位にコンパクトな折本にまとめ表紙を付したものである(c)。各家で作成された手留は奏者番間で当面必要となるものが広く借写され、相当量が蓄積されていった(a・b)。その活用に関わり、奏者番は手留筆筒を作成し、各引き出しにはラベルを貼り、関連する儀式の情報をまとめた(d)。ラベル記述では、年始・五節句・亥猪など節季の儀式、また、御目見・元服・誕生など人生儀礼などの分類記載が見られる。

博物館には、実際に利用された手留筆筒が伝来しており、収納手留数は二十点を超える。また、情報処理・手留作成を実質的に担当した留役・押役・右筆(家中の者)の文書・記録も見られ、これらによって奏者番勤務の実態を確認できるのである。幕府の役職研究では、今日の勤務と異なり、こうした家中の関与を踏まえて検討することが不可欠となつている。博物館の文書は、過去の取り組みを伝えると同時に新たな研究にかけがえのないものとなつている。

## 目次

題字「華山会報」元華山会理事

故小澤耕一氏

P ① 田原藩と幕府奏者番

大友一雄

P ① 目次

P ② 渡辺華山『毛武遊記』16

P ⑥ 『四州真景の旅』③

旅先で訪ねた人物

大里庄治郎

P ⑩ 少年物語語渡辺華山

読書感想文

P ⑭ 華山の田原行(二十三)

P ⑯ 公益財団法人華山会

田原市博物館

田原市渥美郷土資料館

からご案内

渡辺華山『毛武遊記』

16

研究会員 加藤 克己

天保二年（一八三一）十月二十二日続き

華山たちは、足利学校預（管理者）の茂木善治の家を訪ねたが、善治は江戸へ行っていて留守であった。家族が以下の話をした。

（云、学校年久敷く破損しければ、かねて修復を願ひしに、近頃修復を給ふ事ハなく、富といふもの願、百氏、会をなす。其うるほひをもて修復す。これ必其寺社の僧徒も又うるほひある事にて、自然に此勢ひをなす。されバ此学校も又、富を願ひて許されしかバ、善治たゞ此事に奔走して家あらずとなん。しかる「に」又、寅冬足利町火をうしなひ、延焼学校に及、終鳥有に属せしに、たゞ聖堂と書庫とばかりはのこりにたり。これをもて寺僧又、御建立を願ひ出しといふ。聞くものハ土井大炊頭どのなるよし）。

（家族が言う。学校は長年にわたって破損してきたので、かねてから修復を願ひ出てきたが、近頃は公費で修復してもらへることはなくて、富くじというものを願ひ出て多くの人が集まった。その利潤でもって修復する。これは必ずその寺社の僧徒もまたうるおひのあることであつて、自然にこれが盛んになつてきた。それで、この学校もまた富くじを願ひ出て許されたので、善治はただこ

のことに走り回つていて家にいないという。それなのに又、天保元年の冬、足利の町も火災が起こり、延焼は学校に及び、ついに跡形無くなつてしまひ、ただ聖堂と書庫とばかりが残つたのである。これをもつて、寺僧はまた（学校の）建立を願ひ出たという。願ひを聞いてくれるものは土井大炊頭殿であるという）

※ 云 以下は、善治の留守に家族が話したことなので、事実と食い違ふ部分もあるようだ。

※ 近頃修復を給ふ事ハなく 前沢輝政著『新編足利の歴史』によれば、享保十五年（一七三〇）から文政九年（一八二六）までに十回幕府から修復費が下付されている。すなわち、華山が訪れた時より五年前には幕府から百五十両下付されている。しかし、その次の修復は嘉永四年（一八五二）で、「聖堂の修復が行われる」とあるのみで下付の記事はない。

※ 富 富くじ。この時は、江戸の芝（東京都港区）増上寺で行われた。

※ 百氏 多くの人。

※ 寅冬 天保元年の冬。ただし、この火災があつたのは、実際には天保二年の正月という（前沢輝政著『新編足利の歴史』。火災から九ヵ月ほど経っているのので、土地の人が「一年前の火災」と言い、華山が天保元年の冬と認識することはありうるだろう）。

※ 鳥有 鳥んぞ有らんや、の意。全くないこと。何も存在しないこと。「鳥有に帰す」で、すっかりなくなる、特に、火災で焼けることにいう。

※ 聖堂 儒教で孔子を祀つた堂。孔子廟。

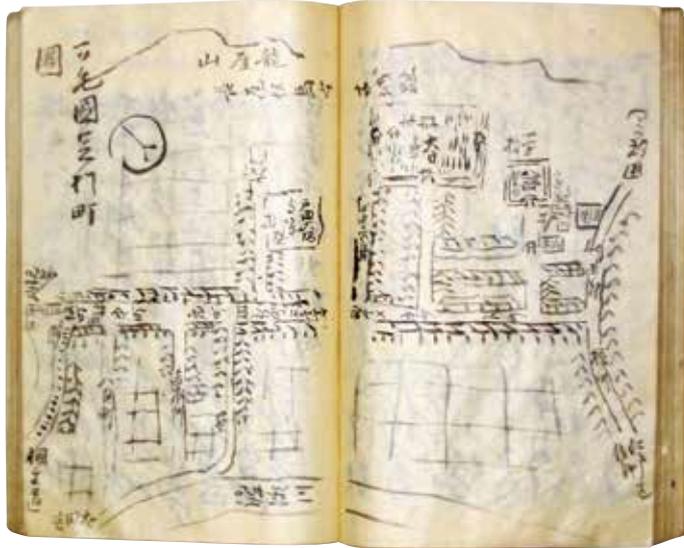
※ 土井大炊頭 土井利位。一七八九—一八四八。下総古河（茨城県古河市）藩主。当時、寺社奉行。後に老中となる。この人の家老鷹見泉石は、渡辺華山の「鷹見泉石像」で知られる。

富くじによる修復は、何回行われたか？

文面からは、足利学校は富くじで得た資金によつて修復してじきに火災で焼失し、また修復のために富くじを願ひ出た、すなわち、富くじによる修復が二回のように読み取れる。しかし、これは家族の話によるもので、必ずしも正しいとは限らない。実際には前述のように華山が訪れる五年前に幕府から百五十両下付されていたので、富くじによる修復は一回だけの可能性がある。

此日は善治のもと新に家つくりて引移り、甚いそがハしく、いでて僧院に到。これまた祝融の後、農家のやれたるを仮りの宿にして、いとワびしき住居にて、椽より私公して僧に逢ふ。僧いと野朴、学校由来を話。ミなかりにもふけたる事多く、聞くべからず。されど皆因循事を伝。此僧のいつはるにあらざるなるべし。

この日は、善治の家では新しい家を作つて引き移り、たいへん忙しかった。そこを出て、僧院へ行った。これもまた、火災の後、農家の壊れたのを仮の住まいとして、たいへんわびしい住居であつて、軒先から入つて僧に会つた。僧はたいへん

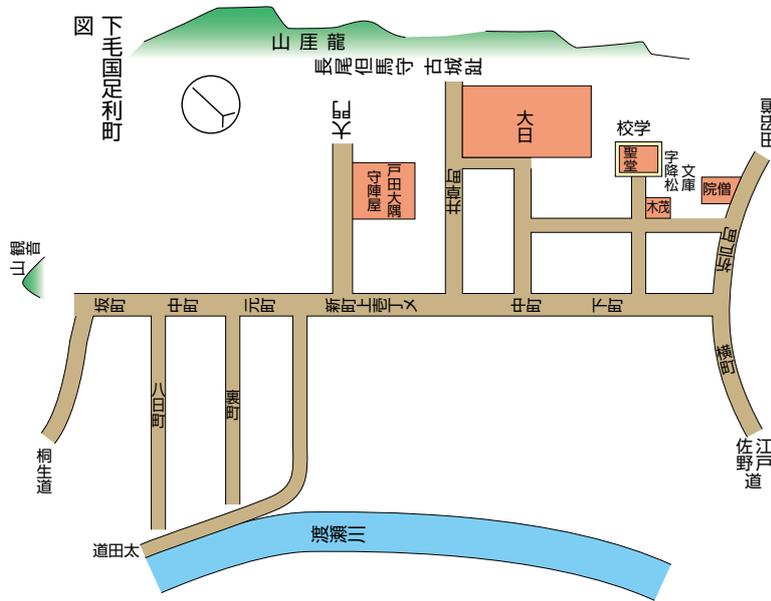


下野国足利町図

※ 祝融 「祝融」は、もと中国古代神話上の帝王。という。「祝融」は、もと中国古代神話上の帝王。所とも考えられる。

※ 僧院 次に出来る足利町図には、学校の近く、東南東方向に「僧院」とあるが、場所は先行研究で断定されていない。図の「学校」が本来の場所。「僧院」は火災後の仮住まいの場所とも考えられる。

純朴で、学校の由来を話してくれたが、皆作り話のようなことが多くて、真剣に聞くべきものではなかった。しかし、すべて古い言い伝えであって、この僧がうそを言っているのではない。



下野国足利町図

※ 赤帝と号したという。のちに火神。夏をつかさどる神、南方の神、南海の神ともされる。

※ やれたる 「破れたる」か。破れた。壊れた。

※ 椽 たるき。屋根を支えるため、棟から軒先に渡す長い木材。

※ 私公して 「伺候して」か。参上して御機嫌伺いをする。

※ かりにもふけたる 作り話のような。

※ 因循 既成のものによりかかること。

赤帝と号したという。のちに火神。夏をつかさどる神、南方の神、南海の神ともされる。



当時、このような絵図があつて、それを華山が写したのであるか。

「下野国足利町図」とよく似た構図の現況写真  
渡良瀬川の南の浅間山の山頂(足利上浅間神社)から撮影。

按<sup>スルニ</sup>足利<sup>ニ</sup>為<sup>レ</sup>地、在<sup>リ</sup>下毛<sup>ノ</sup>南<sup>西</sup>ノ隅<sup>ニ</sup>。南<sup>ハ</sup>接<sup>シ</sup>武<sup>ニ</sup>、西<sup>ハ</sup>隣<sup>ス</sup>上毛<sup>ニ</sup>、東<sup>北</sup>ハ<sup>ハ</sup>抛<sup>ル</sup>山<sup>ニ</sup>。其<sup>ノ</sup>山<sup>不</sup>甚<sup>ク</sup>高<sup>ク</sup>、最<sup>モ</sup>近<sup>キ</sup>者<sup>ヲ</sup>為<sup>リ</sup>龍崖<sup>山</sup>、山<sup>勢</sup>ハ<sup>ハ</sup>繚<sup>ト</sup>繞<sup>ト</sup>如<sup>シ</sup>堵<sup>シ</sup>牆<sup>ノ</sup>。是<sup>長</sup>尾<sup>但</sup>馬<sup>守</sup>憲<sup>長</sup>古<sup>跡</sup>。南<sup>西</sup>ハ<sup>ハ</sup>帶<sup>レ</sup>河<sup>ヲ</sup>、如<sup>ク</sup>曳<sup>カ</sup>匹<sup>練</sup>、即<sup>チ</sup>渡<sup>瀬</sup>川<sup>ノ</sup>末<sup>流</sup>。中<sup>央</sup>ハ<sup>ハ</sup>有<sup>リ</sup>街<sup>、</sup>茆<sup>瓦</sup>鮮<sup>次</sup>、一<sup>千</sup>六<sup>百</sup>余<sup>煙</sup>、平<sup>田</sup>數<sup>千</sup>畝<sup>、</sup>如<sup>シ</sup>棋<sup>局</sup>。

私が考えるに、足利の地は下野国の南西の隅にあり、南は武蔵国に接し、西隣は上野国、東北は山であり、その山はそれほど高くはない。最も近いのは両崖山であり、山の形勢は垣根のようにまわり巡っている。ここは、長尾但馬守憲長の古跡である。南西には川が流れ、白く細長く練り絹を曳いたようであり、渡良瀬川の下流である。中央に街があり、茅葺屋根と瓦屋根がうるこのように続き並んでおり、一千六百余戸、平地の田は数千畝、これらが碁盤の目のように並んでいる。

※ 足利 足利郡のうち。近世の郷帳類では五箇村と足利新田からなり、二村の連続街区を足利町と通称した。領主は変遷し、宝永二年（一七〇五）からは足利藩戸田氏領となり、同藩の陣屋所在地となった。

※ 下毛 下野国。

※ 武 武蔵国。

※ 上毛 上野国。

※ 最近 ここでは、時間ではなく、距離が最も近い。

※ 龍崖山 両崖山。標高二五九m（足利市西宮町・本城一丁目）。古くは要害山ともいわれ、要害がなまって両崖になったという。山頂に足利城址がある。天喜二年（一〇五四）藤姓足利成行が築城したと伝える。藤姓足利氏が滅び、廃城となっていた。文正元年（一四六六）足利荘の代官となった長尾景人は足利荘の中央に位置する勸農城（足利市岩井町）に入っていたが、永正九年（一五二二）以降、景長は居城を両崖山城に移した。

※ 繚繞 まつわり巡るさま。

※ 堵牆 垣根。

※ 長尾但馬守憲長 一五〇三—一五五〇。長尾景長の嫡男。通称は新五郎。戦国時代の武将。山内上杉氏に仕え、足利荘を支配した。画業に優れ、和歌をたしなんだ。

※ 匹練 一匹の白い練り絹。

※ 茆 じゅんさい。水中に生ずる植物の名。芽。「茆屋」で、「茅葺の屋根」。

※ 鮮次 鱗次か。うるこのように続き並ぶ。鱗比。

※ 一千六百余 「余」とあるから概数のはずだが、どうして「六戸」という端数がついているのか不明。次にも同じく「一千六戸」とあるので、この数字を華山はどこかで見たか聞いたかしたのであろう。

※ 煙 ここでは煙突から転じて戸数を数える単位として用いられているか。

※ 平田数千畝 「畝」には、田の間を区切る盛り土の意があり、ここでは田が数千枚あること

を意味するか。なお、村高は、「元禄郷帳」「天保郷帳」とともに、足利新田一二〇石、五箇村二〇一六石余とある。

※ 棋局 碁盤または将棋盤。

街税は二百戸が定額であるが、実際には（足利の町は）一千六戸となっている。街の勢いが盛んといえるであろう。

土は黒くてたいへんいい土で、稲がよく育つ。山があり、よく茂っており、川があり、田畑に水が潤っている。洪水と干ばつの心配をすることがないという。

※ 街税二百戸 領主からの税は、今と違って個人ごとでなく町村ごとに課せられた。足利の町は戸数が増えても昔のまま課税されたという意味か。ただ戸数については、寛政期に九二四軒であったのが、安政期に一六八一軒と大幅に増加しているが、その間は史料がないという（『近代足利市史』）。華山が何に基づいて記述したか不明。

※ 杭糶皆登 稲がよく育つことか。

※ 浸灌 田畑に水がうるおっていること。

※ 水旱之憂 洪水と干ばつの心配。

街税は二百戸が定額、其<sup>ノ</sup>実<sup>ハ</sup>為<sup>リ</sup>一<sup>千</sup>六<sup>百</sup>戸<sup>、</sup>可<sup>レ</sup>言<sup>フ</sup>盛<sup>ト</sup>也。

土<sup>ハ</sup>黒<sup>ク</sup>上<sup>々</sup>、杭<sup>糶</sup>皆<sup>登</sup>、有<sup>リ</sup>山<sup>茂</sup>密<sup>、</sup>有<sup>リ</sup>河<sup>浸</sup>灌<sup>、</sup>不<sup>レ</sup>知<sup>ラ</sup>水<sup>旱</sup>之<sup>憂</sup>云<sup>フ</sup>。



足利織姫神社 足利市西宮町

機織を司る天八千々姫命（あめのやちちひめのみこと）・天御鋒命（あめのみほこのみこと）の二柱の神様は伊勢国の神服織機殿（かんはとりはたどの）神社の祭神であったが、企業地足利の守護神として、一七〇五年にこの二柱の神様を勧請し、その分霊をお祀りしたという。現有社殿が完成したのは昭和十二年（一九三七）。

〔欄外に〕

足利学校ノコト分類節用ト云、書二見ユ。

足利学校のことは、「分類節用」という書物に書かれている。

※ 分類節用

日常生活用語を説明した『節用集』のことか。著者不明、室町時代末期に成立。諸本があり、その内容にはかなりの差がある。江戸時代に入り、さらに大衆性を増して改編され、通俗辞書として流通した。

足利ハ、以ニ木綿ヲ為シ産ト、其製売他郷ニ。緻密ナルモト如ク蚕織ノ、名ツケテ曰フ結城木綿ト、鬮郷皆機織、其利ハ為レ饒ト。故ニ他郷ノ氓蟪集、為ニ此盛レ知レ也。

足利は木綿の生産が盛んで、その製品を他の郷に売っている。緻密な織り様は絹織物のようで、名づけて結城木綿という。町の人は皆、機織りを業として、その利益はたいへん多い。そのため、他の郷から住民が群がり集まって来ており、足利の盛んな様子を知ることができる。

※ 蚕織 絹織物。

※ 結城木綿 茨城県結城地方産の絹織物に似せて織った木綿の織物。足利で始まったので、足利結城ともいう。

※ 鬮郷 一郷残らず。全村。村中。

※ 饒 ゆたか。はなはだしい。

※ 氓民。外来の民。移住民。

※ 蟪集 「蟪」は、ハリネズミ、多いさま。「蟪集」で、一時に群がり集まること。

木綿市ハ、以ニ月五日・九日、其群集者ハ、八九里外之民。朝、木綿市、夕、雑貨市ナリ。足利ノ巨商、為レ僧、小民ハ、駢臻、売販、或、以ニ絹帛ヲ販、亦不レ妨云。

木綿市は毎月五日、九日に開かれ、それに群れ集まる者は八、九里外の人々もいる。朝は木綿市が、夕方には雑貨市が開かれる。足利の巨商は仲買業者であり、小民が物を集め並べて販売する。あるいは絹織物をもって商売し、また妨げないという。

※ 月五日九日 毎月五日、九日、十五日、十九日、二十五日、二十九日の六斎市。ただ、桐生の支配下にあり、足利織物市場が桐生の市場支配から独立したのは翌天保三年（一八三二）のことという。

※ 八九里外 一里は約三・九kmなので、三十km以上遠く。

※ 僧 仲買業者。

※ 駢臻 物を集め並べる。

※ 販ぐ あきなう。商売する。

※ 絹帛 絹の布。絹織物。

（続）

『四州真景の旅』③

旅先で訪ねた人物 大里庄治郎

研究会員 中神昌秀

一 序

華山は、文政八年（一八二五）夏、利根川下流域を旅して、『四州真景図』を制作します。その旅の中で訪問した、最も重要な人物は、下総国香取郡津宮村（現香取市）の名主 久保木清淵（一七六二～一八二九）と下総国海上郡荒野村（現銚子市）の富豪 大里庄治郎（一七八三～一八四五）です。

久保木清淵については、『四州真景図』本文中に「久保木太良右衛門ヲ訪」という記述があり、訪問が確認できます。大里庄治郎については、『四州真景図』本文に記述はありませんが、四州真景三部作の一つである刀祢游記に名があります。これは、銚子での大里の歓待に対するお礼として、華山が大里へ贈ったものであり、訪問は疑問の余地がありません。

最も重要な二人ですが、『四州真景図』の人物解説では久保木に比重がおかれていることが多くないように思います。その理由として、久保木は『四州真景図』本文に名が記載されていること、当時の著名な儒学者であること、日本初の実測精密地図を作成した伊能忠敬の仕事に関与してい

ることが挙げられます。そこで今回は久保木に比べて、あまり解説が多くない大里庄治郎を訪ねる旅を試みたいと思います。

二 刀祢游記

刀祢游記については、『四州真景の旅』①旅の同行者（華山会報第三六号）で紹介しましたが、大里を訪問した際、大里が、七月十五日夜、利根川に舟を浮かべて華山一行を歓待したという話です。風流な文体で書かれた絵入りの巻物仕立の、歓待記ともいえるべきものです。ここで改めて訪ねてみたいと思います。

刀祢游記は、「盆の月いつかいでくる、もしらぬ膝の上に松のかけさしのぼれば窓ちかうおしよりて、唯ふるさとの空なつかしきをり、人のいり来て、いかにぞやといふ。」という文章ではじまります。次に「こはこの里に名おへる一場のすき人にて、名を桂麿といふ。予が海上にたよひ遊ぶを、あはれとおもひそめて、とひいたれるなりき。」という文章の中に、桂麿という名で大里庄治郎が登場します。

そして、大里が利根川に舟を浮かべて華山を歓待する場面へと進みます。その様子は「舟は金波の中にさし入て、盃の数は河原の真砂にたぐへんと、いよ／＼佳境に入。」と書かれています。

最後は、「仲秋良夜、たま／＼雲はれて 清光四字を照し、すぎし游を思い出し、わすれぬうちにと、病の間に筆をとり、遠く大里ぬしの一

笑を博むといふ。わたのへの能保流」という文章で終わっています。この最後の文から、銚子滞在中の思い出を刀祢游記一卷にまとめ、大里へのお礼として仲秋の名月に贈ろうと、制作されたものであることがわかります。

なお、刀祢游記は、大里家に代々所蔵されていましたが、昭和二十年（一九四五）の銚子空襲で焼失してしまいました。

※刀祢游記の口語訳については、別の機会に全文を掲載することとし、今回は省略します。



『刀祢游記』

### 三 『華山書簡集』の中の大里

埵三宛（「門田の栄」製本の件）

次は、書簡の中の大里を訪ねる旅をしてみましよう。大里庄治郎は『華山書簡集』（小澤耕一編著）の中にも登場します。

天保六年（一八三五）十月七日付書簡は、「門田の栄、製本いつ頃出来候哉。可相成ハ早き方上々御座候。版木取ニ上候。一、桂丸先生今日御来駕籠やと存候処、御案内なきま、明日歟と存候。いつれ前広御案内願候。其節ハ先生御世話御同伴祈申候。」と書かれています。

これは「門田の栄」の、製本はいつ頃出来るのでしょうか。早いに越したことはございませぬ。印刷用の版木でしたら、取りに伺います。桂丸先生は、今日御来訪と聞いていましたが、連絡がないので明日になるのでしょうか。いづれにしても前もって御連絡をお願いします。その時は先生のお世話をし、同伴して頂きますようお願いいたします。」という意味です。

この書簡から製本屋の埵三と桂丸という俳号の大里庄治郎が何らかの関係にあることがわかります。そして華山は、大里を先生と書いています。『華山書簡集』の人名で、先生の敬称をつけているのは、華山の絵画の師である谷文晁（一七六三〜一八四一）を写山先生と書いている例があります。大里は華山にとって、銚子で世話になった豪商というだけでなく、尊敬すべき人

物として位置づけられているのではないでしょう。か。

### 四 『華山書簡集』の中の大里

小林経蔵宛（書籍題箋の無心状）

『華山書簡集』の中にもう一つ大里の名が出てくるものがあります。月日不明の小林経蔵宛て書簡です。

「此間、行方屋御同伴添奉謝候。表紙外題のケイ、御スリ置御座候ハ、十二・三枚頂戴奉願候。頓首 登 小林経蔵様」と書かれています。これは、「この間は行方屋大里庄治郎様を御同伴していただき感謝申し上げます。表紙外題用の罫紙で印刷済みのものがあれば、十二・三枚頂戴たくお願い申し上げます。」という意味です。

小林経蔵と四州真景の旅の同行者小林蓮堂は同一人物であるという説があります。仮にこの説が正しいとすると、俳人である小林蓮堂と風流人で俳人でもある大里に交流があるのは自然です。その交流のうえで大里を同伴したということになります。

### 五 御穀宿（ごこくやど）

さて、御穀宿という聞き慣れない言葉がでてきましたが、これも大里と深い関係があるので、それを訪ねる旅をしてみましょう。

銚子は、近世初期から前期にかけて幕藩的な流通機構に位置づけられる過程で、御穀宿、藩蔵、

気仙問屋（廻船問屋）、穀仲買等の諸施設が整備されてきました。

このうち御穀宿は、東北諸藩の廻米（回送する年貢米）を取扱う商人のことです。諸藩から特権を与えられ、廻米の陸揚げ、蔵への出し入れ、江戸への回漕、濡米の売り払い等を行っていました。

銚子で扱米をする際には、銚子へ出張した藩の役人と協議して御穀宿から仲買人に通知し、入札により売却していました。

銚子は、近世には飯沼、新生、荒野、今宮の四ヶ村で構成されていましたが、荒野村に五軒、今宮村に一軒、計六軒の御穀宿がありました。その他に幕府天領の御城米を扱う御穀宿が荒野村に一軒ありました。

銚子市田中義家文書によれば、元禄四年（一六九一）には仙台藩の御穀宿であった信太清左衛門は荒野村の名主を兼ねる等、御穀宿は村の有力者が担っていました。

安政五年（一八五八）には、仙台藩、米沢藩、相馬中村藩は、藩独自の蔵屋敷を持ち、笠間藩、棚倉藩、磐城平藩は御穀宿の蔵を借り上げて使用していました。

大里家は磐城平藩安藤家（六万七千石）と棚倉藩井上家（六万石）の御穀宿になっていました。その六代目が行方屋大里庄治郎富文です。大里家の家業については、第九代大里庄治郎憲文（一八五四〜一九〇九）が明治二十九年（一八九六）



その中に文化十四年（一八一七）五月二十七日から六月一日まで銚子に滞在し、桂丸と交流した様子が書かれています。今度は一茶との交流を訪ねる旅を試みましょう。

『七番日記』の中の五月二十八日は、「八晴桂丸に入」、五月二十九日は、「九晴桂丸李峰と浜一覽ス」六月一日は、「一晴南風辺浄国寺登望西台 桂丸李峰」と書かれています。

ところで、高名な一茶がなぜ桂丸を訪問したのでしょうか。それは、桂丸の俳句の師 恒丸と一茶の知友関係にあります。文化四年四月二十七日には、恒丸主催の句会に一茶も参加しています。それ以外にも何度か同じ句会で会っています。

また知友関係を証明するものとして、一茶と恒丸の俳書があります。恒丸の俳書『葛齋月並抜粹』『しきなみ』等に一茶の句が収録されています。逆に一茶の俳書『文化句帖』『三韓人』等に恒丸の句が収録されています。

そして、一茶の訪問は、桂丸のみならず恒丸派の俳人たちとの交流が目的であったと考えられます。『七番日記』には銚子の前後にいくつかの地名がでてきますが、そこは恒丸派の俳人の居住地と一致します。

なお、銚子市にある浄土宗一立山無衰院浄国寺には一茶の碑があります。その碑には「此臺の清風た、ちに心涼しく西方仏土もかくあらんと 本と、す 爰をさること遠からず 一茶坊」

という碑文が刻まれています。



銚子市 浄国寺望西台 小林一茶句碑

## 八 終わりに

大里について、今までの解説本では、豪商であるとか、風流人であるとかの説明はありますが、どのような商人だったのか、風流といっても、どのような風流だったのかという説明がありませんでした。この文章の中で、多少とも、豪商や風流人の具体的な解説ができたかなと思います。

ところで今回の文章を書くため、資料を探しているうちに、偶然にも銚子の御穀宿に関する論文を複数入手することができました。また、大里の俳句の師である恒丸についても、平成二十四年に出版された書籍を購入できたおかげで、理解が深まりました。大里が編集した句集のなかに谷文晁の挿絵が使用されていたり、恒丸の碑文を久保木清淵が書いていたりして、私にとっては新発見がありました。華山がなぜ大里宅に泊まったのか。また、なぜ久保木を訪ねたのかの手がかりになるような気もします。今後の調査に役立ちそうです。

今回は原文の引用が多く、また小テーマごと全く別の話で読みにくかったかもしれない。次はなるべく読みやすく書こうと思っています。それではまた。

### 参考文献

- 『港町銚子の機能とその変容―荒野地区を中心として―』 歴史地理学調査報告書第八号 筑波大学歴史・人類学系歴史地理学研究室
- 『近世における東廻り航路と銚子港町の変容』 斎藤善之 国立歴史民俗博物館研究報告 第一〇三集
- 『鴛鴦俳人 恒丸と素月』 矢羽勝幸 二村博著 歴史春秋社
- 『一茶 七番日記』 丸山一彦校注 岩波文庫

## 「少年物語 渡辺華山」

### 読書感想文について

公益財団法人

華山会では、郷

土の偉人渡辺華

山先生の功績を

後世に伝承する

事業の一環とし

て、毎年市内小

学六年生に対し、「少年物語 渡辺華山」の冊子

をプレゼントしてまいりました。感想文の募集

を行ったところ、三四一件の応募をいただきました。

この中から優秀賞に選定されました六点の作

品をご紹介させていただきます。

応募いただきました学童の皆さんやご協力を

いただきました各学校の先生方に厚くお礼申し

上げます。

公益財団法人華山会事務局



### 心に生き続ける、渡辺華山

田原中部小学校 六年 藤田 楓

華山先生は、寛政五年、貧しい家の八人兄弟の長男として生まれました。わたしは、学芸会の華山劇で、先生の妹「もと」役を演じました。そして、華山先生のことを勉強するにつれて感じたことがあります。それは、努力家でも心が強いということ。一家の暮らしをよくするため、小さいころから雨の日も風の日も休むことなくおつとめはげみ、弟や妹のお世話もしながら絵を習い、両親の手伝いもしたそうです。

弟や妹を奉公へ出すときは、一生会えない悲しみに負けず、今まで支えてくれた父が亡くなった時にもくじけずに次に向かって暮らしを支えようとさらに努力するすがたは、わたしも見習い、弱音をはかないようにしたいと思いました。

天保のききんでは、米がとれず日本中が苦しんでいることを知り、心配した先生は、お米や麦をためておく倉をつくりました。人民のための倉という意味で報民倉と名づけられ、先生は米十俵入れました。人のためを思い、その思いを、口だけではなく実行したことが田原藩でうえ死にする人を一人も出さなかった事につながったとわたしは思いました。他にも自分の着物をぬいで人にあげたり、自分のご飯の量を減らし人にあたえたりもしました。助けられた人やその話を聞いた人は先生の心の広さにとっても感動したそうです。

蘭学と関わっていた先生は無実の罪でろうに入られ家はすみずみまで調べられました。それを聞いた先生の弟子や恩師が手をつくしようやくろうから出られた先生の体は皮ふ病や胃腸の病気です

いじやくしていたそうです。わたしはききんなどのいろいろな事で人を助けた先生を罪もないのにろうに入れるのはひどいと思います。しかし先生はろうから出れた喜びを味わい、家族と暮らすことが何より嬉しかったそうです。

華山先生と関わりがあつて一番心に残っている場所は池ノ原公園です。先生が最後を過ごした家からは、家族を思い人のために働いた華山先生のいろいろな思いが伝わってくるような気がしました。銅像からは、大切な人を残して亡くなったさみさと遠くの未来を見ているような気持ちが感じました。

わたしの将来の夢は葉ざいしです。華山先生の努力する気持ち、常に優しさを持ち続ける心などを手本にしていろいろな人を助けみんなから親われるような人になりたいと思います。

まず最初は学校生活を見直して、華山先生のように困っている子がいたら進んで声をかけ下級生には優しい心でいい見本になれるように努力したいです。いやなことにも文句を言わず、どんなに苦しくてもあきらめない強い心を持ちつらい時悲しい時でも上を目指そうとする立派な志を持った華山先生。もう亡くなってしまいましたが、今もこれからもわたし達の大切なきょう土の偉人です。

### 郷土の偉人 渡辺華山先生

田原中部小学校 六年 伊藤 千夏

華山先生は寛政五年の秋、江戸で生まれ小さい時から貧しい家庭で大へん苦勞をして育ちました。家のために毎日働いて、お金をかせがなければいけないこと。食事もあり食べる事ができず家族のための薬も買えません。仕事のため、自分のやりたい

勉強をするひまもない中、必死に生活し、学び、努力した人でした。弟や妹は寺奉公や女中奉公に連れて行かれ悲しい生き別れとなってしまいました。それでも華山先生はつらい現実をしっかりと受けとめていました。私だったらたくさん泣いて前を向くことができないと思います。先生はなんぎな事、かなしい事にあうごにふるいたって、かならずりっぱな人になって家の者を幸せにしてやろうと思いき弱音をほきませんでした。人はみんな生まれた環境はちがうけど私もそのことに甘えずに先生のように強い心を持つことが大切だと感じました。先生は心がやさしく行動力のある人でした。いざという時のことを考えて報民倉をたてました。天保の大ききさんの時、作物はめちやくちやになり、うえ死にする人があちらこちらにありました。先生は「百姓があるからこそ殿様も何不自由なくぜいたくをなさることができるのであります。」などの内容の書きものを出しました。上下関係のある時代に百姓を大切にしたので、田原藩ではうえ死する人が一人もいなかったと思います。

自分には、いったいどんな行動力があるのだろうか。私には大きな夢があります。夢を実現するために知識を身につけ、クラブの練習を休まずに目標を達成することが行動力があり大切なことだと思っていました。でも、もっとまわりに目を向けることができれば仲間や友達と助け合うことができたと思います。先生は弱い立場であるみんなの命を一番に考えることができたので、多くの人に信頼され報民倉がたてられたのだと思いました。私も、集団生活の中で、相手の気持ちを受けとめ困っている人に声をかけたり、自分の考えをしっかりとって行動し仲間から信頼されるように、努力したいと思えます。

先生は自分の手で命を終わらせてしまいました。自分が生きているばかりに多くの人に迷わくをかけ、家族や藩主、友人たちにも何らかの沙汰があるだろうと判断し、自刃することを決意しました。私は先生が自分の生きた社会を心の中では大切に思っていたのだと感じました。

私も生まれ育った田原の町が大好きです。私の通う小学校では私たちが華山劇を演じます。先生のことをくわしく勉強したことで劇にもとても気持ちよこめることができるようになりました。そして、華山先生のすばらしさを色々な人に語りついでいきたいと思います。これからも努力することをわすれずに、色々なことにチャレンジしていきたいと思えます。

「少年物語 渡辺華山」を読んで  
衣笠小学校 六年 牧野友飛

この本は、華山先生こと渡辺華山の生涯が描かれています。華山先生と言えば、明治以前の国の暗い世の中を、良くしようと身を削りながらも努めてこられた方です。また、無実の罪におち、田原の地で自刃された田原藩の家老であることは、有名なお話です。

華山先生がちょうどぼくたちと同じ年頃の時を描いた劇「立志」や「板橋の別れ」は、多くの従兄が学芸会で演じたものを見たことがあるので、知っていました。特に「立志」はあの時殿様の行列にぶつからなければ、大学者になって、殿様を教えることができるような先生になろう、なんて思わなかったかもしれません。あの時、ひどい屈じよくを味わったからこそ、余計に頑張ろうと相当な努力をして

きたに違いありません。

華山先生のすごいところは、どんな環境でもそれに負けない強さを持っていることです。いくら貧しい家庭であつても、それを理由にできない、などとは言えません。お金がなくても、先生や友達に本を借りて、うつす。勉強するための工夫や努力を惜しみませんでした。また、まだ働く年ではないのに、絵の才能もあつたため、絵を売り、家計の手助けもしていました。きつと、ぼくなら、家計を助けること以前に、貧しいを理由に、勉強することすら、投げ出していたことでしょう。

また、貧しくて困っている人々を何人も助けました。決して自分にお金の余裕がある訳ではないのに、自分の着物を売ったりし、商売を再開するためのお金を工面してあげたりしていました。血のつながりがある親せきであつたとしても、そう簡単にやってあげられることはありません。本当に心の底から良い人だと思いました。もちろん、そんな華山先生だから、人々から感謝され、したわられていました。

華山先生は、49歳という若さで自ら命をたちました。

決して長い生涯ではありませんでしたが、華山先生の人生は大変立派なものであつたと思えます。自分のことより、家族や周りの人々の幸せをまず先に考え、とても大切にしていました。

ぼくは今、病気で、自分のことだけでいっぱい日々の毎日を送っています。華山先生のように、周りの人のことも優先して考えるなんて余裕は、正直今のぼくには、ありません。でも、ぼくは、病気にだけは負けたくありません。今は、病気が邪まをして、できない事もあるけど、いつか大人になった時に、ああしておけば良かった、と後悔しないよ

うにはしたいです。少しずつでもできる事を一つひとつ増していきたいです。お母さん、おばあちゃん、先生や友達にも、心配や迷惑をかける事もたくさんあります。でも、いつかその恩を返せるような人になりたいと思います。これから先も色々な困難があるでしょう。でも、ぼくは、あきらめない強さを持ち、夢に向かって一歩一歩前進していきたいです。

### 「少年物語 渡辺華山」を読んで

伊良湖岬小学校 六年 小久保 綾華

私は、毎年、書道教室で、「華山展」に出品する作品を書いています。その時に、いつも書道の先生から「渡辺華山」という名前は聞いていました。でも、私は、この人がどういう人なのかということ、くわしくは知りませんでした。今回、「少年物語 渡辺華山」を読んで、渡辺華山の一生、人がら、もの考え方などを知ることができました。

この本を読んで一番心に残ったことは、華山が自分のことよりも常にまわりの人のことを考えていたことです。小さなころから家族のことを、そして、大人になってからも、弟子や自分が仕える田原藩やとの様、まわりの人々のことを大切に思い、行動していました。

天保のきさんの時には、との様に申し上げて、人民のための倉「報民倉」を建てました。「との様があるからこそ、農民が安気にくらしていきけるのだ」と考えられた時代に、華山は、「人民によって国が立ってゆくのだ」という進んだ考え方をもっていました。おかげで田原藩では、うえ死にをする人が一人もいませんでした。みんなの命を一番に考えていた華山だからこそ、このような行動ができたのだと

思います。また、貧ぼうの中に育った華山は、人が困っている時には、相手のことを思い、自分がどんなに困っても助けました。本当に心が広く、優しい心の持ち主なのだと思います。

華山は、常に親への孝行を忘れず、自分を支えてくれた人への感謝を忘れずに生きました。そして、人一倍努力して自分のしたい勉強をし、仲間といっしょに日本のためになることを行い、正しい道を進みました。しかし、華山たちを快く思わない人たちの悪だくみによって、華山はろう屋に入れられてしまいます。環境の悪いろう屋の中でも、年老いた母のことを心配していました。私は、華山がそこでよんだ歌を読んで、華山は何も悪いことをしてないのに、と心が苦しくなりました。まわりの人への感謝を忘れず、自分の信じた正しい道を進んできた華山だからこそ、支持してくれるたくさんの人々がいて、その後、ろう屋から助け出されたのだと思います。

けれど、華山は、藩主に迷わくをかけないよう、自害の道を選びました。それでも、自分のことを悪く言い、苦しい立場に追いこんだ人々をうらむことはありませんでした。死ぬ間際まで、家族に対する細やかな愛情を忘れない人でした。華山をおとしれる悪だくみがなかったら、華山がろう屋に入ること、病気になることもなかったかもしれません。もともと長生きをして、もっと多くのすばらしい絵を残したかもしれません。日本のために働くことができたかもしれません。それを思うと、残念ではありません。

渡辺華山の姿をくわしく知り、私も華山のように、常にまわりの人への感謝の気持ち忘れず、まわりの人に優しくできる、まわりの人のことを考えて行動できる人になりたいと思いました。そして、

人に迷わくをかけないように生きていきたいと思っています。今年、「華山展」の書道作品を書く時には、華山のことを思いながら書きたいと思っています。

### 「少年物語 渡辺華山」を読んで

衣笠小学校 六年 藤 沢 ユリ

私は、この本を読んで心に残った場面が三つあります。

一つ目は、登が殿様の行列にぶつかってしまった場面です。ぶつかったのは、自分と同じ年ごろの若君の行列で、登はさんさん暴力をふるわれまいた。登はこの出来事をきっかけに、生まれのちがいで身分に差がつくことに怒りや悔しさを感じました。そして、殿様を教えるような大学者になり、殿様よりも上に立ちたいと決心をしました。私は、何か一つのことをきっかけに、目標を立て、それに向かっががんばることができるといいことだと思えました。お金がなくても、努力をして勉強を続けたから、活やくできたのではないかと思います。

二つ目は、華山先生が魚屋を助けるために動いた場面です。本を読んで一番感動したり、考えさせられたりした場面でもあります。ききんで苦しむ元魚屋のためにお金を集め、魚屋をもう一度できるようにしました。そして、お札に魚を持って来た魚屋に、「志はありがたいが、もらうわけにはいかない」と、魚を買い、さらに買った魚も「明日の元手にしなさい」と渡しました。魚屋以外にも華山先生に助けられた人はたくさんいました。自分のことよりも相手のことを一番に考えて行動したり、自分の考えでたくさんの方が救われるのは、本当にすごいなと思えました。私はたまに人のことよりも自分

のことを考えてしまうことがあるので、華山先生のように人のことをよく考えられるようになりたいです。また、物事をいろいろな見方で見て考えることも大事だと思いました。

三つ目は、華山先生が牢に入れられてしまった場面です。牢に入れられて苦しい想いをしている時でも、人のことを考えていることにとっても感動しました。華山先生は牢に入っている時に、「あさなわにかかるうき身はかずならず 親のなげきを とくよしもがな」といううたをよみました。このうたは、お母さんのことを心配してよんだうたです。自分が牢に入れられ病気にもかかり、辛い思いをしているのに、お母さんのことを心配しているなんて、本当に自分のことよりも人のことばかり考えている人なんだなと思いました。

私はこの本を読んで、華山先生のいつも人のことを考えている姿にとてもおどろきました。それと同時に、自分のことだけでなく、人のことも考える大切さもいろいろな場面で感じました。人のことを考えて動くことはこれから生活していく中で、とても大切なことだと思います。クラスの中でだれかがやらなくてはいけないとき、私も心の中で、めんどくさいなあ。だれかやってくれればいいのにとか、そんなことやるのはずかしい、もしやったら何か言われるかとか、いろんなことを考えてしまつて動けないときがあります。すぐには変えることができないかもしれないけれど、私も少しずつ人のために動けるようになります。

## 渡辺華山を読んで

六連小学校 六年 鈴木峻平

明治以前の、とざされた暗い世の中だった日本に、新しい時代の夜明けを願って命がけで考えぬいた人、それが渡辺華山です。華山先生は、貧しい家庭で生まれ育ち、とても苦労して暮らしていました。しかし、親によく仕え、勉強にはげみ、すぐれた知識と芸術性をもって、各方面で活躍されたそうです。後に、無実の罪によって牢屋に入れられ、そこから出された後も、田原の地で罪人として家にとじこもつてついで暮らしていました。さらに、華山先生を苦しめるようなうわさも流され、日本の将来を考えながら現在の田原市にある池ノ原で自害されたそうです。

ぼくはこの本を読んで、今の時代の便利さや、今と昔のちがいについて考え直すことができました。ぼくたち子どもは、自由に遊ぶことができます。お腹が空けば、好きな時に好きなものを食べて空腹を満たすことができます。病気になっても、薬局や病院に行けば薬をもらうことができます。現代を生きるぼくたちにとって当たり前のことが、昔は当たり前ではありませんでした。遊ぶ時間は今よりもずっと短く、食事も最低限の道具と食材しかありませんでした。病気になっても、それが何の病気か分からないまま、何も手をほどこされずに死んでいく人がたくさんいました。そんなかん境の中でも決してくじけず、絶え間ない努力と強い信念を持って生きぬいた華山先生は、とてもすごいと思います。

華山先生のすごいところは、小さなころからありました。華山先生が今のぼくと同じくらいの年ごろに、当時の殿様の行列にぶつかってしまい、だま

つてなぐられ続けたそうです。ぼくはとても不思議に思いました。きつとぼくなら、たくさん言い訳をしたり、なぐってきた相手への不満がぼくはついたりすると思います。でも華山先生は違いました。自分の領主や親にめいわくをかけないように、決して口を割ることをしませんでした。それどころか、目の前にいる殿様をしっかりと教育できるような先生のような人になろうと決心し、それから病気で体を悪くした父親の看病をしながら休むひまなく勉強を続けたそうです。大きくなり、西洋の文化を勉強しようとして長崎へ行くことを希望するようになりました。父親の反対により断念することになりました。できる限りの努力をし、蘭学の勉強を続けました。西洋の技術や文化を良く思わない人に嫌がらせをされても、国の未来のために決して勉強をやめることはしなかったそうです。

華山先生の、いづどんな時でも、自分のことより周りのことを考えて行動しているところが、一番すごいと思います。他の人のためを考えていることもすごいけれど、国の将来を考え、願いをかけていたことに強く心をうたれました。ぼくは、そんなことまで考えたことはありません。でも、そんな華山先生がこの田原にいたことを誇りに思います。先生を見習って、少しでも自分以外の人のために努力できるような人になりたいと思います。



# 華山の田原行 (二十三)

二月二十二日 (続)

「きぬがさ山の麓に到る。山左右よりかこみ冷気を人をうちて寒し。抑滝頭といふハ其名たゞしからず。頭滝ともいはゞ其名よきを、頭といふハ滝源の沢をいふにや。」

藤七原で棚田を見た後、華山一行は、衣笠山の麓に着きます。衣笠山は、標高二七八mの山で、近くの蔵王山・滝頭山とともに、赤石山脈の支脈の南端にあたります。これらの山々は、田原アルプスとも言われ、三河湾国定公園の一部となっています。現在は、自然歩道としてさまざまなコースが整備されています。山頂の岩場には、田原神社奥宮が祀られています。

衣笠山の西隣にあるのが、標高二五六mの滝頭山です。

衣笠山や滝頭山の麓は、現在滝頭公園として整備されています。

「むかしハ杉林多くありしを今ハ斧斤に害ひて、月代おれるやうになりたり。されバ水ハかれ、滝ハ細うなりてあはれなりとぞ。此わたりハフロガ



谷といふ。滝の右ハ炭やき山、雑木ばかりある所ハ鳥留りといふ。左ハ吹付山といふ。」

現代なら環境破壊といったところでしょう。斧やまさかりでの杉の木伐採により、山としての貯水力が減り、滝の水量が減ってしまったようです。「炭やき山」とあるので、杉を炭にするために伐採したのかもしれない。伐採以前は、修験者の修行場であったように水量豊富な滝だったのでしょう。

「フロガ谷」のフロとは、ムロ(洞窟・岩屋)から転じた語で「籠る所」を表しています。また、ムロは、もともと神のいる所を意味しています。このことから、滝頭の滝は修行に適した場所であったと思われる。

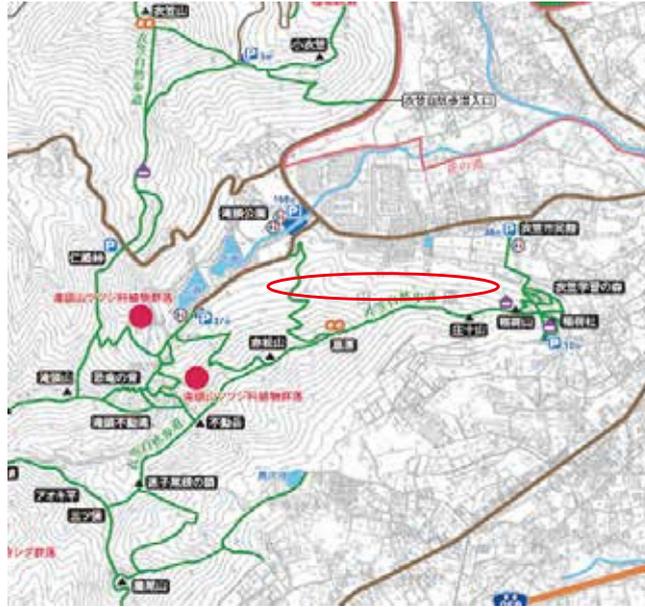
滝頭不動について、「瀧頭不動尊由緒」には、次のようにあります。

天平二十年(七四八年)渥美氏源五郎重国が郡司に任命されたという。このころ、釋行基菩薩は郡内を巡歴して佳境に佛堂を建立し重国の処にも留錫したといわれる。瀧頭山が信仰的靈地になったのもこのころとされている。(略)

奈良時代ころから山詣りによる山間修行が行者によって行はれ続いて平安中期ころからの浄土思想による地藏並に観音信仰と共に瀧頭不動も何れかの行者の発願によって祭祀され其の後八大童子・三十六童子・聖観音・不老ヶ谷の三十三所観世音石像も建立されたものである。本尊不動尊の忿怒形相は悪魔降伏の精神であり行者呪力躰得の妙体でもある霊瀑水煙は六根清浄の禊である。以来不動尊の信仰は益々盛に遠近の信者現当二世の勝益を得るために此の聖地に修行し参詣者今日に絶

えない靈験益々貴く山紫水明山峰の展望絶佳  
春は桜秋は紅葉四季を通じて可ならざるはな  
く正に天下の靈地なり

『たはらアルプストレッキングガイド』より



「吹付山」が現在のどの山なのかは不明ですが、右の地図の赤丸あたり（滝頭山に向かつて左。華山の記述と一致する。）に「吹付」という地名が残っていることから、赤松山か庄十山ではないかと思われれます。

「やがて巖の上に坐をしめて、酒をとり出し、三友相かたむく。風ハ北風にていとさむし。巖左右より打つゝみて、いばら、かや、すゝき、もろもろの雑木生ひしげりて、瀑二流あり。一者ハ巨石の上をはしり落、一ハ崖にかゝりて白糸のごとし。この糸のごときものを第一瀑とす。」

滝頭山を登っていくと、途中に滝頭不動が祀られているお堂があります。その横を通り、さらに登ると、二の滝、不動滝（一の滝）があります。不動滝の周りには石仏（不動）が祀られています。華山一行が休憩した岩は不明ですが、三人は、そこで滝見酒と洒落こんだようです。

「やがて第一所に到んとて此巖をすべり下り、石にとり草をからみて径もなきところをようやく瀑のもとにいたれり。先つとし、久津野宇宙といえる医師、此瀑に樋をもふ病者をうたしむ。石像不



華山が「巨石の上をはしり落」と記した二の滝

華山が「崖にかゝりて白糸のごとし」と記した一の滝



動あり。又此医の作りし所とぞ。山上に到、水源を見る。いと滾々たる流なり。むかしハ杉の大木ありしよし。今皆斧に害なハる。加地山の峰に登り御領の内をのぞむ。浦、吉湖のわたりより大久保、高松のわたり迄見渡さる。」

華山一行は、その後滝の水源まで行き、こんこんと水が湧き出る様子を見ます。ここが前頁で華山が述べた「頭といふハ滝源の沢」なのでしょう。「山上」とは、不動岳ではないかと思われれます。

次に一行が行った「加地山」も現在のどの山か不明ですが、現在の加治という地名から、赤松山もしくは不動岳と思われれます。そこから藩内を見て、華山は何を思ったのでしょうか。

研究会員 柴田雅芳  
(続)

公益財団法人華山会  
 田原市博物館  
 田原市渥美郷土資料館  
 からご案内

博物館特別展・企画展のご案内

開催中～十二月十日(日)

**特別展** 近世能装束の世界 用の美～武家貴族の美意識  
 (企画展示室)

能装束講演 十二月十日(日)

午後一時三十分～ 山口能装束研究所  
 同時開催：渡辺華山と弟子が描く花鳥  
 (特別展示室)

十二月十六日(土)～平成三十年一月二十八日(日)

**冬の企画展** 保美貝塚 渥美半島の縄文時代晩期の大貝塚  
 (企画展示室二)

縄文セミナー 一月十四日(日)  
 午後一時三十分～長田友也(中部大学)

展示解説 十二月十六日(土)  
 一月十三日(土)

午後一時～当館学芸員  
 同時開催：渡辺華山の吉祥  
 (特別展示室)

平常展のご案内

二月三日(土)～四月一日(日)

華椿系の流れ (特別展示室)

二月十日(土)～四月一日(日)

ひな人形と初風展 企画展示室

期間中スタンプリーを開催します

渥美郷土資料館企画展のご案内

十月二十八日(土)～十二月十日(日)

**秋の企画展** 発掘された渥美半島の歴史 (企画展示室)  
 発掘調査報告会 十二月二日(土)

午後一時三十分～  
 いずれも渥美郷土資料館

二月一日(木)～三月二十一日(水・祝)

**企画展** 第32回ひな祭り展  
 (企画展示室)

江戸時代から現代までのひな人形の変遷を展示。

**イベント** 着物を着ておひなさま気分になろう 三月三日(土)

県内の博物館・資料館をめぐるひな祭りスタンプリーを開催します

【賞品有】



観覧料

特別展 一般 六〇〇円(四八〇円)

冬の企画展

一般 四〇〇円(三二〇円)

特別展・企画展開催時は小・中学生無料  
 毎週土曜日は小中高生無料

一般 二一〇円(一六〇円)

小・中学生 一〇〇円(八〇円)

(一)内は二十人以上の団体料金  
 渥美郷土資料館は無料

休館

毎週月曜日(祝日の場合はその翌日)、展示替日、十二月二十八日～一月四日

(公財)華山会から  
 華山・史学研究会会員募集中

申込場所 華山会館事務室  
 毎月第四土曜日研究会  
 視察研修(年一回)に参加できます。

田原市博物館友の会会員募集中

入会申込書に年会費千円を添えてお申し込みください。

特典

博物館への無料入館  
 展覧会・催し物のお知らせ  
 見学会に参加できます。  
 博物館だより(年数回)・華山会報  
 をお送りします。

華山会報 第三十九号

平成二十九年十二月一日発行

編集発行 公益財団法人華山会

理事長 鈴木 愿

常務理事 林 勇夫

事務局長 小川金一

〒四四一―三四二一

愛知県田原市田原町巴江二の二

TEL 〇五三一・二二・一七〇〇

FAX 〇五三一・二二・一七〇一

編集協力

田原市博物館

華山・史学研究会

会長 小林一弘

吉川利明

石川洋一

林 哲志

中村正子

柴田雅芳

池戸清子

山田哲夫

加藤克己

別所興一

藤城精一

中神昌秀

※華山会報ご希望の方は華山会館・田原市博物館にお申し出ください。  
 次回発行予定 平成三〇年六月一日